

中瀬有紀

常に青い隣の芝生



© Yuki Nakase

San Gennaro

舞台美術家のPaul Steinbergは自身のウェブサイト中で、“I think of myself as being a “designer” as opposed to being as “artist.” (私は自分自身をアーティストというよりもデザイナーだと思っています)”と記しています。アーティストもデザイナーも問題を解決するのが仕事だということでは同じですが、アーティストは問題提示から解決まで全てが自らの活動であり、デザイナーは共同制作者に問題を提示され解決を頼まれる、とPaulは言います。彼が続けて、“I am inspired by collaboration on a text with a director.” (私は脚本に基づく演出家との共同作業に触発させられる)”と書いているように、脚本と演出家との関わりがデザインの大きな柱となるようです。

脚本と照明家との関わりは日米に大きな差がないように思います。脚本が存在する公演の照明をデザインするには、どちらの国にいても本を読むことが初めの第一歩であり、続いて時代考証とDramaturgeが不可欠です。それでは、演出家と照明家の関わりはどうでしょう。先日、日本で活躍する舞台照明家から「アメリカは照明家の立場が確立していて良いね」という言葉を聞きました。なんとなくアメリカの舞台ほうが照明家の発想や意見が作品に反映されているイメージがあるのだと思います。確かに、私自身の過去を見返してみると、現

在は日本で活動していた頃と比べてデザインミーティングに持ち込むアイデアの量が多くなりました。演出家や他のデザイナーと意見交換するために、脚本の分析、調査結果とイメージ画を用意します。演出家の発想を聞くのがミーティングの大半だった過去に比べて、現在はさまざまなデザインの可能性を提示し、演出家と一緒に一つ選ぶという具合です。しかし、その差は私自身に変化したことの証であり、日米の差ではありません。私のこれまでの経験では、演出家に対する照明家の仕事の差は日米の文化の違いというよりも個人差、演出家との関係の差のほうが大きいように感じます。

照明デザインの課程において、脚本が暗示する世界の実現と演出家から受けた要望に対して、安全管理に反しない限り「YES」と応えるのは、脚本が創造の始まりであること、演出家が他の共同制作者との通信路になっていること、そして全体を見ている演出家の目を信頼しているためです。信頼しあえる関係を築くための互いの自己開示がデザインミーティングの役割であり、質の高い作品制作の共働のためにデザイナーは絶えず成長していくことが必須である現状は、日本にいてもアメリカにいても同じだと思います。